

2026春のナースウェーブ



～持ちつ持たれついい看護～

5月16日（土）、京都JAビルにて「2026春のナースウェーブ」を、ひろがれ看護のこころkyoto連絡会（主催）として開催し、84人が参加しました。



集会では、NHK朝ドラ「風、薫る」の原作「明治のナイチンゲール 大関和物語」の著者・田中ひかるさんをお招きしました。講演では、ドラマのモデルとなった「大関和」と「鈴木雅」の生き立ちやキャリアをたどりながら、女性の経済的自立や看護師という職業の確立が社会に果たした役割について学びました。田中さんは、「看護師に世話にならない人はいない。だからこそ、看護師が辞めない、そして“なりたい職業”であり続けるために、給与や処遇を改善に社会全体が関心を持つべき」と訴えました。

続いて、京都社保協政策委員の中村さんより、現在進められている医療制度改革についてお話していただきました。国民皆保険の解体につながる、医療保険制度から「療養」を外す「一部保険外療養」や、「病床機能分化」からさらに「医療機関機能分化」を進めようとする国の狙いについてわかりやすく解説されました。国の方針では、医療にかかれぬ人は「医療ニーズがない」とみなされており、「患者になれない人」等の声を届ける医療労働運動への期待と重要性が語られました。

講演後の職場からの発言では、現場の深刻な実態が6人から次々と出されました。

京都市立病院からは病床削減や看護師採用減について、桂病院での二交替勤務導入や賃金制度改悪、太秦病院からは経営難や看護師不足、「やりたい看護ができない」状況など厳しい実態が共有されました。参加した学生からは「処遇改善のために、こうした取り組みが行われていることを知らなかった。皆さんの運動に感謝したい」との発言もあり、過酷な現場の中で奮闘する姿が印象に残りました。

集会後には京都イオン前で宣伝行動を実施し、約50人が参加。看護師たちが現場の深刻な実態を訴え、署名は約50筆集まり、署名付きハガキも500枚以上配布しました。医療・看護の現場を守り、安心して働き続けられる職場を実現するため、今後も運動を広げていきます。



（イオン前での宣伝の様子）

